琉球大学学術リポジトリ

自閉症児のコミュニケーション指導に関する研究

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 神園幸郎 公開日: 2009-03-06 キーワード (Ja): 自閉症, 愛着, コミュニケーション, 情動, 対人関係, 鏡像反応 キーワード (En): autistic children, communication, emotion, interpersonal relatedness, mirror response 作成者: 神園, 幸郎, Kamizono, Sachiro メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/9107

＜ 研 究 3 ＞

自閉症児にみられる対人関係の逆転現象

神　園　幸　郎

Inversion of Interpersonal Relatedness in Children with Autism

Sachiro KAMIZONO

琉球大学教育学部障害児教育実践センター紀要
第 3 号
The Research and Clinical Center for Handicapped Children
Faculty of Education, University of the Ryukyus
No. 3
Mar. 2001

琉球大学教育学部障害児教育実践センター紀要
No.3, 15-36, 2001.

自閉症児にみられる対人関係の逆転現象

神 園 幸 郎

Inversion of Interpersonal Relatedness in Children with Autism

Sachiro KAMIZONO*

Summary

It has been observed in our clinical situations that the good relatedness with others, which a child with autism had maintained up to that time, turned bad or was lost when he or she became to have good relatedness with a specific other. The present study examined this phenomenon, namely an inversion of interpersonal relatedness in children with autism. Consequently, the inversion of interpersonal relatedness was observed in all three subjects. The backgrounds of this phenomenon were discussed with relation to intelligence leves, existence of utterances, attachment levels, and so on.

Key Words: children with autism, interpersonal relatedness, attachment, specific other

問題の所在

近年の自閉症研究はこれまで主流を占めてきた認知・言語障害説（Rutter & Bartak, 1969; Rutter, 1978）に代わって、かつての Kanner (1943) の主張と同様に社会性障害を一次障害とみる研究が大きな流れを形成するようになってきた．そして，自閉症の社会性障害を包括的に説明する枠組みとして Baron-Cohen, Leslie & Frith (1985) の「心の理論欠如仮説」が登場するに至って、自閉症の社会性障害に関する研究はますます盛んになってきている．

自閉症児における社会性障害の本質を探る糸口として、最も身近な他者である養育者に対する愛着の形成過程は注目されるところである。自閉症児は養育者に対して愛着を示すのだろうか。従来の研究によれば、自閉症児は見知らぬ他者（stranger）よりも養育者に接近－探索行動を示し、このことは精神年齢が等しい知的障害児や健常児と同じであることがわかっている。さらに、愛着行動の成立は象徴機能やコミュニケーション機能の発達と連関することが指摘されている（山上、1999; Sigman, & Ungerer, 1984; Shapiro, Sherman, Calamari, & Koch, 1987; Caps, Sigman, & Mundy, 1994; Rogers, Ozonoff, Maslin-Cole, 1991, 1993）。これらの結果は，他者と関わりを持てないとして指摘されてきた自閉症児においても，最も身近な養育者に対しては愛着を形成することができることを示した。

しかし、こうした事実とは裏腹に自閉症児の親達は我が子が示す愛着の様相が健常児のそれとは明らかに異なっているとの感触を表明し、自閉症児の愛着研究から得られた研究成果に違和を唱えている（Volkmar, Cohen, & Paul, 1986）。なぜ、こうしたことが起きるのであろうか。おそらく、このズレは上述した研究を含めて自閉症児の愛着研究の多くが愛着対象への物理的接近の量を尺度とするストレンジ・シチュエーション法 (Ainsworth, Blehar, Waters, & Wall, 1978)

*Faculty of Education, Univ. of the Ryukyus

に基づいているために生じたものと思われる。つまり、量的な尺度では捉えきれない、自閉症児に特有な愛着の様相があることを予想させるのである。別府（1994）が指摘するように、自閉症児の愛着を問題にする際には愛着の量的側面よりも、むしろ何を求めて他者に接近するのかといったやりとりの質的側面に重点をおいて検討する必要があろう。

ところで、自閉症児に特有な愛着の様相として、次に示すような現象がある。すなわち、愛着対象との２者関係を基軸として獲得された比較的豊かな認知的、情緒的なコミュニケーションが、他の社会的場面ではほとんど適用されず、社会性障害として顕現化することである。たとえば、保育所では集団の遊戯場面に参加しようとせず保育士の前では何もしない子どもが、母親の前ではその場面にいかにも参加していたかのように再現して見せたりするのである。この当該２者関係にだけ閉じた、いわば関係特殊的な自閉症児の自己表現活動は、山上（1999）によっても指摘されているところである。

さらに、自閉症に特有な対人関係の特異性として、「関係性の逆転」とでも命名できるような現象を指摘できる。この現象は上述した２者関係が他の関係に広がらないというだけでなく、新たな関係が形成されるとそれまでに築かれていた他の良好な関係が希薄になり元に戻ってしまうというものである。まさに、新たな関係がそれまでの関係に取って代わる、すなわち、関係が逆転してしまうのである。この現象は筆者が関わった自閉症幼児の臨床場面においてたびたび観察された。対人関係の逆転現象は先に指摘したような自閉症児の親が実感している自閉症特有な愛着の様相、それに前述した２者関係が他の関係に広がらないという現象をも包含しているとみることができる。そうすると、「関係性の逆転」現象を詳細に分析することを通して、自閉症児の対人関係の質的な特異性を明らかにし、中核症状としての社会性障害の本態に迫ることができるかもしれない。

そこで、本研究ではまず第一に「関係性の逆転」現象が自閉症児に特有な現象として記述できるかどうかを確認する。そのために、自由遊び場面における自閉症児と養育者との関係および当該自閉症児と特定の他者との関係を同時並行的に観察し、それらの関係の変遷を追跡する。自閉症児における新たな愛着対象の形成は長期にわたる持続的な関わりを必要とする。したがって、比較的長期にわたる縦断的な観察がなされなければならない。本研究では３事例について、10ヶ月から１年９ヶ月にわたって関係の変遷を追跡した。

第２は、「関係性の逆転」現象と自閉症児の個人差要因との関係である。まず、「関係性の逆転」現象は自閉症児が愛着対象に示す愛着の質の違いによって影響を受けることが考えられる。別府（1994）は自閉症児が愛着対象に何を求めて接近するのかという観点に基づいて、愛着の質の発達的変遷を指摘している。それによれば、密着的接近を求める関係、不安・不快な場面で求める関係、そして心理的安全基地を求める関係の３つの発達段階が想定されている。そこで、本研究では別府（1994）を参考にして、愛着の質的様相と「関係の逆転」現象との関係を捉えることにする。次に、個人差要因としての知的能力と「関係の逆転」現象との関連を検討する。そのために、知的能力が高い、いわゆる高機能自閉症児と軽度および中度の知的障害のある自閉症児を本研究の対象児とした。

第３に、「関係性の逆転」現象が何を契機として出現したかを明らかにすることによって、関係性の変動に影響する要因を解明することにした。

以上の観点から「関係性の逆転」現象を詳細に分析することによって、自閉症児の社会性障害の起源について検討することを本研究の目的とした。

方　法

１．対 象 児

本研究で対象とした３名の自閉症幼児のプロフィールをそれぞれの事例ごとに以下に記述した。対象児の研究開始時の年齢、収録期間、および収録回数は表１に示したとおりである。なお、各対象児の新版Ｋ式発達検査の結果を表２に示した。

＜事例１のプロフィール＞

本児は199×年生まれの男児である。父35歳、母31歳の時に第１子として生まれた。妊娠２カ月時と４カ月時に切迫流産の兆候があったが、無事

に経過した。しかし、出産時に胎児の心音が微弱になったため、急遽帝王切開に切り替えられたが仮死状態で産まれた。定頸３カ月、始歩12カ月で乳児期前期の発育は順調であった。１歳の誕生日の頃はワンワンなどのいくつかの言葉が出現し、歌にあわせて遊戯のような身振りもできた。ところが１歳３カ月には視線が合わなくなり、つま先で歩くようになった。１歳６カ月児健康診査で自閉症の疑いを指摘され、２歳前には児童相談所と保健相談センターにおいて自閉症と診断された。この頃の本児は母親以外の他者を寄せ付けず、他者が近づくと声を出して威嚇したり、部屋のドアを閉めたりした。ちょうどこの頃から文字や数字に興味を持ちはじめ、２歳２カ月には簡単な文章を読めるようになった。コップ２つをくっつけて「８」、ドーナツを「０」など、身の回りのモノを数字にあてはめたり、指で数字の形を作って眺めるなどの特有な行動がみられた。さらに、アルファベットもすぐに憶えてしまった。２歳半頃から一語発話による自発語が出はじめ、３歳では200語ほどの語彙を有していた。パニックに陥ると、知っている単語を次から次にわめきながら泣いた。３歳１カ月の頃に約１カ月間、母子通園施設に通った後、３歳３カ月で公立の保育所に障害児保育の該当児として入所し、その後２年間をこの保育所で過ごした。本研究の対象児として観察が始まったのは、本児が保育所に入所して３カ月後の４歳６カ月のときであった。この頃はようやく２語発話が出るようになっていたが、文字や数字に対するこだわりが強く、横目がちにモノを見るなど依然として自閉的な行動が前景に出ていた。その後、５歳３カ月時に公立の幼稚園に入園し１年を過ごした後、小学校に入学した。本児の観察は小学校入学を前に終結された。観察期間は１年８カ月であった。現在、本児は小学校２年生の通常学級に在籍している。学習面は優秀であるが、他者との関係をうまく結べず社会性の問題が依然として存在している。５歳８カ月時に実施された新版Ｋ式発達検査における全領域の発達指数は106であった。

＜事例２のプロフィール＞

本児は199×年生まれの女児である。父20歳と母20歳の第１子として生まれた。本児は在胎36周の早産で、生下時体重は2100ｇであった。黄疸のため保育器に５日間入った。定頸３カ月、始歩10カ月で乳児期前半の発育は特に問題はなかった。１歳６カ月児健康診査において言葉の遅れと多動を指摘された。２歳６カ月になって公的な療育機関の医師から自閉症と診断さた。その後、その療育機関で週１回の割で言語訓練と療育訓練を受けた。３歳４カ月頃から、「ダッコ」「ミズ」などの要求の言葉が出はじめた。絵本にも興味を示し、母親が読み聞かせをすると、気に入った部分だけを模倣するようになった。両親が共働きのため、２歳の頃から保育園にあずけられたが集団に馴染めず、園側から拒否された。そのため、２歳半から別な保育園に通いはじめるが、約１年の後その園でも同様な理由で拒否された。そして、３歳４カ月になって公立の保育所に障害児保育の該当児として入所した。入所当初は各保育室や事務室を歩き回り、部屋の照明、電話、電気ポット、扇風機などのスイッチやキーボードを操作するといった行動が頻繁にみられた。しかし、保育所の環境に慣れるにつれて、担当の保育士とも目が合うようになり、表情が豊かになった。遊びは専ら一人遊びで、紐通しや型板はめなどに熱中した。本児の一人遊びに他児が加わってくると、途端にその場から立ち去り関わりを避けた。遊びの順番などにこだわりがあり、それが崩されるとパニックを起こすこともあった。言葉は反響言語がほとんどあったが、場や状況に合った言葉も僅かであるが出現していた。保育所に入所して１年が経過する頃には排泄も自立し、保育所の日課を一通りこなせるようになった。本児が保育所生活の２年目を目前にした４歳３カ月から、本研究の観察が開始された。本児は保育所に２年間通所した後、現在は公立の幼稚園に就園している。観察は現在も継続中であるが、本研究では本児が４歳３カ月から５歳１カ月までの約10カ月間を分析対象とした。

観察開始に先立って実施された新版Ｋ式発達検査における全領域の発達指数は57であった。

＜事例３のプロフィール＞

本児は199×年生まれの男児である。本児は父40歳と母33歳の第１子として生まれた。

在胎38周に吸引分娩にて生まれた。生下時体重は2938ｇであった。出生直後は泣き声はあったが

元気がなく、初期嘔吐があったため２日間、点滴を受けた。新生児期は吸啜反応が弱かったため、搾乳した母乳を哺乳瓶で与えられた。定頸は３カ月、始歩は10カ月で、乳児期前半の発育は順調であった。しかし、１歳半になっても発語がなく、指さしや要求行動などの前言語的行動もみられなかった。さらに、人への関心が薄く、しかも目線も合わなかった。１歳６ヶ月児健康診査において、発達の遅れを指摘された。そして、１歳10ヶ月の時に保健所で自閉症と診断された。その後、地域の母子通園施設に通いながら公立の療育機関で週に２回の療育指導を受けた。この頃の本児は感覚的な刺激に翻弄されているような状態であった。たとえば、窓の黒いカーテンが風で揺れると、それに見入ってしまったり、保育士が本児の身体に触れると大声を出してパニックに陥った。２歳10カ月で公立保育所に障害児保育の該当児として入所し、その後４年間、同保育所に在籍して障害児保育を受けた。保育所入所当時の本児は手振りや首振りなどの常同行動やチラシや絵本などへのこだわり行動、さらには石ころや紙などを食べる異食行動など、様々な特異行動が出現していた。保育所の生活が２年目になると、身体接触への抵抗が消失し、排泄が自立するといった変化がみられた。要求もクレーン行動で示すことができるようになったが、依然として発語はなく、人への関心もきわめて乏しいままであった。本児の保育所生活の２年目が終わる頃に、本研究の観察が開始された。当時の本児の年齢は４歳８ヶ月であった。本児は現在養護学校小学部１年生に在籍している。観察は現在も継続中であるが、本研究では観察開始から約１年半の経過を分析対象とした。

観察に先立って行われた新版Ｋ式発達検査における全領域の発達指数は41であった。

表１　対象児の内訳

	性別	開始時年齢	期間	回数
事例１	男	4:06	20カ月	37回
事例２	女	4:03	10カ月	20回
事例３	男	4:08	17カ月	35回

２．手　続　き

対象児と養育者（事例２は両親、事例１と事例３は母親のみ）は１～２週間に１回の割で筆者が所属する大学に通ってきた。セッションに入る前に約10分程度の茶話会を持ち、落ちついたところでプレイルームに移動した。まず、対象児と親の自由遊び（以下、親子遊びと略す）が行われた。その様子は同室するVTR撮影者によって約30分にわたって収録された。次に親と特定の他者（４年次の学生）が入れ替わり、対象児と特定の他者の自由遊び（以下、他者遊びと略す）場面、が同様に収録された。収録されたVTR資料はトランスクリプトされ、分析の資料として利用された。

３．分析方法

分析はそれぞれの事例ごとに特定の他者と撮影者それに筆者の３名によって行われた。対象児と親および特定の他者との自由遊び場面を、遊びの全体的特徴、親および特定の他者への対象児の愛着行動、そして対象児の行動特徴などの視点で３名の分析者がそれぞれ独自に分析した。そして、それぞれの分析結果を持ち寄り、３名の合議のもとで分析結果を集約して当該セッションの記録とした。本研究はこの記録資料に基づいて行われた。

表２　新版Ｋ式発達検査の結果

	検査時の生活年齢	姿勢・運動領域		認知・適応領域		言語・社会領域		全領域	
		DA	DQ	DA	DQ	DA	DQ	DA	DQ
事例１	5:08	－	－	6:02	109	5:10	103	6:00	106
事例２	4:03	－	－	2:08	63	1:10	43	2:05	57
事例３	4:08	2:11	63	2:01	45	1:02	25	1:11	41

結果と考察

各事例ごとに親子遊び場面と他者遊び場面における本児と親および他者との関係を縦断的に分析することによって、「関係性の逆転」現象を把握し、その発生の機序を以下に考察した。

＜事 例 1＞

本児と親および他者との関係の変遷は、「関係性の逆転」という観点で大きく5つの時期に分けられた。表３に示した結果に基づいて、それぞれの時期ごとにその特徴について記述した。

第１期：新奇な環境への不安

第１回のセッションにおいて本児は初めての場所に対する不安な表情をみせていたが、遊戯室に母親と入室して遊びはじめると次第に明るい表情になった。それゆえに表面的には本児の不安は解消されたように見えた。しかしながら、本児は自宅から持ってきた「赤ずきん」の絵本を片手にしっかりと持ち、両手を使わなければならない場面でも決して絵本を離そうとしなかった。このことから、本児の不安反応が依然として強く存在していることが読みとれた。

遊戯室での母子の自由遊びは、本児が関心を持って自発した遊びではなく、専ら母親が提案した遊びに受け身的に関わるだけの遊びであった。しかも、母親の指示を受けなければ次の行動に踏み出せないかのように、たびたび母親を参照した。母親が本児の働きかけに応えてモデルを示範して見せると、本児は安心したようにそれを模倣するのであった。母親によれば、本児のこうした行動は本児が不安に陥った時に特徴的に現れるとのことであった。恐らく、新たな環境における不安な気持ちが本児を心理的安全基地としての母親へと向かわせたのであろう。

母子の自由遊びは母親主導でしかもモノの名称や色名などの教え込みを中心とする関わりであるにも拘わらず、本児は嫌がる素振りもなく母親の指示や働きかけに応じていた。したがって、表面的には母子の遊びの形態として共同遊びが成立しているようにみえた。

母子自由遊びのセッションが終わり、母親が遊戯室から出て行くと本児は不安そうに母親を眺め、母親の姿が見えなくなるまで見送っていた。母親に変わって入室した特定の他者Ｔが本児を遊びに誘うが、本児は依然として母子自由遊び場面から持っていた絵本をしっかりと手に持ち、Ｔが差し出す遊具には目もくれず母親が出ていったドアの方をみていた。本児の様子を察したＴが母親の待機している場所を示し「お母さんは、向こうのお部屋でお勉強している」と本児を安心させる言葉をかけると、本児は「お母さんは、お勉強している」「お母さんは３階にいる」（実際は本児がいるプレイルームと母親の待機場所は同じ階の２階にある。数へのこだわり）などと何度も繰り返した。しかも、これらの言葉は確認のためにＴへ向けられたというよりも、むしろ自らを安心させるための独り言としての役割が強かった。したがって、この時点ではＴとのやりとりはほとんど成立していなかった。

しかし、本児の母子分離不安はセッションを重ねるにつれて、次第に減少した。Ｔが差し出す遊具を手にするが、それらを積極的に操作することがなかった本児は次第に自分の好きな遊具で遊びはじめるようになった。それらの遊びは大小のペグが順序よく並んだモンテッソリ教具や型板はめなど、形や大きさなどを対応づけるようなあそびが専らであるため、Ｔとのやりとりは成立せず、ひとり遊びに終始した。しかしながら、こうした遊びに集中するようになると、母親の所在を確認するような発話は次第に減少するようになった。このことと呼応するように、ペグさしや型板はめで手間取っているときなどにＴが教えてあげたり、手を添えて手伝ってあげると素直に従った。このようにＴと一緒に遊びを完成するといった経験を通してＴとのやりとりが芽生えはじめた（第３回）。

第２期：他者Ｔに対する愛着の成立

第５回の他者自由遊びセッションにおいて、本児とＴがトランポリン遊びによって快の情動共有を経験して以来、身体接触を伴うダイナミックな関わりが増え、それに伴って本児とＴの関係は急速に進展した。絵本を持たなくても活動ができるようになるとともに、Ｔが行うモノの操作の模倣や動作模倣そして音声の模倣が頻繁に出現するよ

うになった。母親との関係の中では日常的に出現していた模倣が、Ｔとの関係でようやくここに来て出現するようになったのは、本児にとってＴが愛着対象として見なされるようになったことを物語っている。

また、本児の所有物をＴに与えるギビング行動が出現した。たとえば、本児が鏡を見ながら木製の「だんご」を食べる振りをしている。Ｔはそれをみて「おいしそう」と言葉をかけると本児は自分が持っているものと同じ「だんご」を遊具棚から探してＴに渡した。また、本児がクッキーを食べているのをみてＴが「おいしそう、ほしいな」と言うと、残り少ないクッキーをＴに分け与えた。母親によれば、本児は好物のお菓子を他者にあげたことはこれまで一度もなかったそうである。「だんご」やクッキーをもらって大喜びしている

表３　事例１の対人関係

	母　親 ⇄ 本　児	他　者 ⇄ 本　児
第1回－第4回	新奇な環境への不安 母親参照の場面が多い 母親が提供する遊びに素直に従う モノの名称や色名などの問いにも応えようとする意欲が旺盛 ⇩ 共同遊び	母子分離不安 母親の所在への言及 「移行対象」類事物の出現（ボール、団子、ブロック） ⇩ やり取りの不成立　⇨　一人遊び ダイナミックな運動遊び （トランポリン、後追い遊び等）　⇨　不安の解消
第5回－第18回	不安の解消による関係の希薄化 母親の関わりへの拒否・無反応 ⇩ 一人遊び	他者Ｔに対する愛着の成立 模倣の出現（他者Ｔの動作の模倣） ギビング行動（他者Ｔに対してのみ、選択的に） 他者Ｔと二人だけの空間の確保（部屋に鍵をかける：「お母さんとは遊ばない、先生と遊ぶ」） ⇩ 共同遊びの成立
第19回－第23回	他者の交代による不安 幼稚園入園による共同環境の変化 母親への接近 母親の指示に従順	母子分離不安 他者Ｎの動きを傍観 心理的距離の存在（指向性のない間接的要求） 運動遊びに誘うが長続きしない　⇨　一人遊び(ブロック) ダイナミックな運動遊び 身体接触　⇨　不安の軽減
第25回－第30回	指示的・教示的な関わりへの回帰による関係の希薄化 ⇩ 母親への拒否反応（ひねくれ反応・無反応）	他者Ｎへの愛着行動 他者Ｎの要求と自分の要求をすり合わせる 母親に要求するような甘えたような声で要求する 多彩な共同遊びの展開 人形を使った象徴遊び　⇨　自己の生活に置き換えたイメージ遊びへ展開
第31回－第37回	母親への接近 母親を遊びに誘う 母親の行動を模倣する 母親の機嫌を取りなす ⇩ やり取り遊び （かくれんぼ、じゃんけん等）	遊びのパターン化 イメージ遊びのエスカレート ⇩ 本児の内的世界に閉じたイメージ遊び　⇨　やり取りの停止（問いかけても反応なし） 無気力 脱力感・声が小さく聞き取れない（抑鬱状態）

Ｔをみて、本児は照れくさそうに微笑んでいた。これらのエピソードは、本児が他者の嬉しさという内的状態を覚知して、それに同化することで情動を共有していることがわかる。限られた場面であるとはいえ、本児とＴの間で情動の共有が成立するまでに愛着関係が形成されてきたといえる。セッション中に出現していた母親の存在についての言及が第４回のセッションになると消失した。そして、母子自由遊びの時間が終わり、母親と入れ替わってＴが入室すると「お母さんバイバイ」と言ってドアを閉め、施錠した。セッション途中で筆者が入室すると大声を上げて笑顔で走り回っていた本児が突然動きが止まり、無表情になった。そして、筆者が室外に出るとすぐに施錠した。本児がドアに鍵をかけたのは、自分とＴとの楽しい遊び空間を確保しておくために他者が入室できないようにするためであったと思われる。このエピソードも本児とＴとの愛着関係を象徴する事柄として見ることができるであろう。

以上のように、身体運動を伴うダイナミックな運動遊びを通して形成されはじめた他者Ｔへの愛着はこの時期に確かなものとなった。

他方、母親との関係はＴとの関係とは裏腹に次第に希薄になった。母親への接近行動を動機づけていた新奇な場所や他者に対する不安が解消されると、普段は本児に快をもたらさないはずの教え込みを主眼とする母親の関わりは一気に本来の性質を現しはじめた。その結果、本児は母親の関わりをことごとく拒否したり、問いかけに応答せず、むしろ母親の接近を避けるかのように一人遊びに没頭するようになった。母親に対する本児の気持ちは次のような言葉となってあらわれた。第５回以降のセッションでは母子遊び場面になると「お母さんとは遊ばない。先生（Ｔ）と遊ぶ」と言って母親との遊びには関心を示さなくなった。こうした本児の態度に母親も意欲を削がれたように「私は体を動かして遊ぶのは苦手なんです」と自嘲気味に心境を語るようになった。当然のこととして、回を追うごとに母子の関係は希薄になった。こうした事態を何とか改善しようとして筆者は何度か母親との面接時に本児との関わりについてアドバイスを行った。その際指摘したことは、とりあえず教え込みの姿勢を棚上げにして、本児の意向に添うような関わりを心がけ、そして、できるだけ身体を使った遊びを工夫するようにということであった。アドバイスの効果は次回のセッションで顕著に現れた。母親の受容的な態度に呼応するように本児は母親への接近行動を示し、母子の共同遊びが成立した。たとえば、「ヘンゼルとグレーテル」の物語をなぞる遊びや「歯医者さんごっこ」などのイメージを仲立ちとした共同遊びなどがそれである。しかし、イメージ遊びは母子の共有体験に基づいているために相互交流を活発にする効果がある反面、言葉による状況の説明を必要としない場合が多いために母子間に交わされる言葉のやり取りが少なくなるというマイナスの要因も内包している。最初は母子間で楽しく展開されたイメージ遊びもそのうち次第にパターン化し、ついには本児の中だけの一人遊びへと変貌してしまった。本児が母親からの身体運動を伴った遊びへの誘いに応じなくなると、母親からの身体を動かす遊びへの働きかけも陰を潜めるようになり、母子の遊び場面は以前の不活発な状態に回帰してしまった。そして、ここにきて母親の教え込みの姿勢が再び前面に出はじめた。母親のこの態度には幼稚園入園に向けた母親のあせりが投影している可能性があった。この時期、母親は本児の幼稚園入園を目前にして、本児が新たな環境へ適応できるかどうかの不安を抱えていた。ちょうどこの頃に、母親は知人からある民間の幼児学習塾を紹介された。この塾に通わせると能力が引き上げられ、障害の克服も可能であるとの触れ込みに刺激を受け、母親はこの学習塾に大きな期待を寄せていた。その塾の方針がいわゆる「スパルタ教育」であるとのことであった。つまり、母親自身がこれまで行ってきた「教え込み」と基本的に同じだったのである。期待をかけている塾の方針が母親の「教え込み」の姿勢を後押しして、以前の関わり方に回帰させたとしても不思議ではない。恐らく、母子の遊びの行き詰まりからくる焦りや苛立ちという要因と塾の教育方針に感化されたことによる要因が相俟って、教示的、指示的な母親の関わりが再現されたのであろう。母親のこうした本児への態度は当然のこととして本児の側に母親に対する一層の拒否的態度を形成することになった。母親への指導によって母親の関わりが受容的に変化

すると、母子関係はそれに呼応し一時的に改善するが、母親が元の態度に戻ると再び希薄になった。

以上を概括すると、第２期は基本的には他者Ｔとの愛着関係に裏打ちされた遊びが活発に展開され、他方母親との遊びは低調に推移した時期であったといえる。

第３期：他者の交代による不安

他者Ｔの大学卒業に伴って、特定の他者が交代した。他者の交代はＴの卒業という不可避の理由だけでなく、積極的な意図があって行われたことでもあった。すなわち、特定の他者が複数化することによって、他者認識における質的変化が期待できるのかどうかを検討することであった。

他者が交代すると、本児の行動は第１回における他者関係と同様な状態に舞い戻ってしまった。つまり、背景に不安を想定させるような行動が出現したのである。たとえば、本児は他者Ｎが遊びに誘っても応じず、Ｎの行為をただ傍観していたり、運動遊びには多少関心を示すこともあるが、すぐにブロックやミニチュアを使った一人遊びに入り込んだ。Ｎとのセッションが3回目（第22回）になると、ようやく要求行動が出現するが、その要求はまだＮへの明確な志向性が見られなかった。他方、母親との関係は他者の交代と時期を同じくして好転の兆しを見せはじめた。これまで「教え込み」の姿勢を強めていた母親に対して拒否的態度を示していた本児は、この時期になると母親の姿勢そのものに本質的な変化は見られなかったにもかかわらず、一転して母親の問いかけに応答するようになった。以前であれば、全く応答がなかった母親の「WH 質問」（何、誰、どこなどの質問）にさえも的確に応答するようになった。さらに、本児は母親の指示に素直に従い、従順なほどの振る舞いを見せていた。本児のこうした態度の変化は他者がＴからＮへ代わったことによって生じた心理的な不安を反映しているものと推察できる。また、この時期は本児が保育所を卒園し幼稚園に入園した頃であり、こうした生活の環境変化に伴う不安も重層的に作用している可能性も否定できない。いずれにしても、本児の心理的な不安状態が母親へと向かわせる要因となっていることは確かであろう。本児の不安に基づく母親と他者Ｎに対するそれぞれの関係はまさに第１期の特徴をそのまま踏襲しているように思われる。

第４期：他者Ｎへの愛着の成立

Ｎとのセッションを重ねるにつれて次第に本児はＮへの接近行動を示すようになった。そして、第24回には第１期と同様にトランポリン上での跳躍をきっかけにして本児とＮは急速に接近しはじめた。しかも、両者の接近の経過は第１期における本児とＴとの関係形成の過程とほぼ同様な過程を辿った。たとえば、ダイナミックな運動遊びとそれに伴う身体接触を通してリラックスしたやり取りが成立すると、突然にＮを強く叩く行為が出現した。この行為も他者Ｔとの愛着形成の途上で一過性に出現したものであった。このように本児と他者であるＴ及びＮとの愛着の形成過程はきわめて類似していた。第１期と同様に、ダイナミックな運動遊びとそれに伴う身体接触が本児の不安を払拭し、他者Ｎへの接近行動を生起したものと考えられる。

本児は以前はモノを使った一人遊びに専念し、Ｎと向かい合うこともなく、もちろん要求行動も行わなかったが、愛着関係が形成されると、Ｎを意識したさまざまな行動が出現してきた。たとえば、Ｎの行為をよく観察していて、それを真似る模倣の出現やＮへの明確な志向性のある要求行動の出現、さらには本児の要求が受け入れられないと、同様な場面で母親に懇願する時に発せられる、甘えた声での要求行動なども見られるようになった。これらのことから、本児の関心がＮに向かっていることがわかる。

本児とＮとの遊びは、運動遊びからモノを介した多彩なイメージ遊びへと拡大した。たとえば、動物の縫いぐるみを使って自己の生活体験を投影した歯医者さんごっこに興じたり、童話の「ヘンゼルとグレーテル」をなぞったりするような遊びをＮと共同して行うことができるようになった。運動遊びからイメージ遊びへの移行は以前の他者Ｔとの関係においても同様に認められており、Ｎとの関係でも同様な過程を辿ったことになる。しかしながら、他者関係の質的側面において、この時期の本児とＮとの関係は以前のＴとの関係とは大きな違いが認められた。たとえば、自己の要求

や意図とNのそれが異なる事態に遭遇したとき、以前であれば自己の気持ちを抑圧して他者の意図や要求に追随するか、もしくは遊びを替えたり、場所を替えたりして一種の逃避行動をするかのいずれかであった。ところが、この頃になると、同様な事態で、しばらく考え込むような素振りをした後で、Nの要求の一部を取り入れ、それでいて自己の要求もそれなりに実現するような解決策を見出し、遊びを継続できるようになった。つまり、自己の要求や意図と他者のそれを擦り合わせて，直面する葛藤状態を解消する手立てを講じることができるようになったのである。このことは本児が他者Nの存在を意識できるだけでなく、Nの要求や意図さらには感情などの内的状態に気づくことができるようになったために、自己と他者の要求や意図に多少のずれがあったとしても、そのことで直ちに不快に陥ることなく、ずれの調整へと向かうことができるようになったのであろう。そして、調整の結果、新たな遊びの局面が開け、そこにNとの新たな快の情動共有が生まれることになる。こうしたことが本児とNとの間に多彩な共同遊びをもたらす要因として考えられる。

他方、この頃には母親への接近行動はほとんど見られなくなっていた。母親の本児への接し方や態度は基本的に大きな変化はみられなかったが、本児と母親の関係はNに対する関係とは逆に次第に悪化の様相を呈していた。母親の指示的、教示的な関わりに対して本児は以前と同様に拒否的に対応するかもしくは応答しないかのいずれかであった。このことに加えて、この時期に母子の関係で問題になっていたのが、いわゆる「ひねくれ反応」（小林、1996）あるいは「挑発行為」（杉山、1990, 1995）と言われるものであった。本児は母親の提案や指示とはまったく逆な行為をしたり、言動をするのである。たとえば、母親が提案した「お店屋さんごっこ」に本児はあまり気乗りがしないながらも同意して、遊びが始まる。本児はマットに寝転んでいるので、母親が再三にわたって座るように指示するが、本児は笑いながら「ちゃんと座ってるよ」と母親に言う。わざと違うことを言って母親の反応を楽しんでいるかのようであった。そして、母親の怒りの感情が前面に出てくると、本児は無反応になり、一人遊びに没入するようになった。こうしたやり取りが幾度となく繰り返されるうちに、次第に母親からの誘いかけも減少し、母子の共同遊びはほとんど成立しなくなった。

第５期：母親への接近

本児は幼稚園に入園してすぐに近所に住むE君と友達になった。これまで同年齢の他児に関心を示さず、ましてや自分から積極的に関わりを持つことなどなかった本児が、E君に対して実に熱心に、積極的に関わるようになった。E君は体が小さく、年齢の割には幼いこともあって、両者の関係では本児が主導権を握っていた。ところが、入園後２カ月近くたった頃、本児がE君を噛んで怪我を負わせるできごとがあった。これまで本児の意のままに動かされてきたE君が、本児の言う事を聞かなくなったことが原因であった。この事件以来、幼稚園側はE君を別のクラスに配置換えすることで、E君との関係を強制的に遮断してしまった。しかも、園側は本児の問題行動を自閉症状にその原因をもつものと捉えずに、いわゆる「わがまま」によるものとみなして対応したためにますます本児を追い込むことになった。この頃から、本児は原因不明の下痢を繰り返し、Nとの遊び場面では、ソファーやマットに寝転がっていることが多くなり、遊びに誘っても乗ってくることがなくなり、Nの問いかけにも聞き取れないほどの小声で、いかにも気だるそうに応えるのだった。

また、こうした状態とはまるで正反対に活動水準が異様に高まり、一種の興奮状態に陥ることもあった。Nと共有できていたイメージ遊びも次第に本児の一人遊びへと変質してしまった。たとえば、輪投げの輪をお皿に見立てて遊んでいた本児は「おやつ場面」のイメージ遊びから、場面が小学校に移り、さらに美容室に変化するといったように、場面のイメージがめまぐるしく変化し、その度ごとに次第に興奮状態に陥っていくようになった。こうした状態になるとNが言葉をかけてもそれを遮るように一段と大声をあげて、自分のペースで自問自答の独語を繰り返すのであった。また、興奮状態に入り込むと本児は決まって時間に対するこだわりが出現した（表４）。本児の内的世界に閉じた独語とこだわりを中心とするイメージ遊びが次第にエスカレートするにつれてNとのやり

表４　事例１の対象児の興奮状態

本　児（R）	他　者（N）
「朝の10時に開くからね」	
	「はーい」
「朝の10時に開くから」	
	「朝の10時…」
「眠りまーす」 「食べて、ご飯食べてから、お風呂入ってから・お風呂入ってから眠りまーす」	
	「眠りましょう」
「11時、11時、８時に絵本読んで、えーと９時に、10時に眠ろうね」	
	「分かった。10時に眠る」
「Ｒは、今何時？今？９時」	
	笑って、「そーか」
「Ｒは何時に帰る？Ｒ？Ｒ１時に帰る。１時に帰る」	

取りはほとんど成立しなくなった。

無気力で生気が感じられない状態、いわば「抑鬱状態」を思わせる本児の行動と、興奮状態に陥り、抑制が効かない行動という２つの相反する現象は、本児の精神状態が極めて不安定であることを物語っている。

この時期、母親との関係はNのそれとはまったく対照を成していた。本児は母親への接近行動を頻繁に示し、しかもこれまで全くみられなかった身体接触による密着的接近状態を母親に要求するようになった。また、母親に話しかける時の言葉が、以前とは明らかに異なり、いわゆる幼児語になっていた。母親によれば、本児が身体接触を求めて母親に密着的接近行動をみせたのは初めてのことであるらしく、母親もようやく母親としての喜びを実感した旨の感想をもらした。

本児は母親の指示に忠実に従ったり、母親の行為を熱心に模倣した。また、本児は母親の機嫌をとるような行動も認められた。これらの本児の行動は、母親との関係を何とか保持し、持続させようとする本児の意思の現れとしてみることができる。さらに、興味深いこととして次のようなことが見られた。これまで母子遊び場面で共同遊びが成立するときは、母親からの遊びの誘いに本児が応じたときや、本児の遊びに母親が介入したときであった。ところが、この時期になると本児は母親に対して積極的に「～しよう」と誘いかけることが見られるようになってきた。共同遊びの成立に本児の主体性が大きく関与してきた。この背景には愛着対象としての母親への志向性とそれに伴う共同遊びによる快の情動共有体験が大きな推進力として作用していることが推察される。おそらく、本児の母親への接近行動は心理的安全基地を求めて生じたものであろう。こうした心理的安全基地を求める動因の強さは、この時期に本児が置かれていた状況、すなわち、上述した幼稚園における心理社会的な抑圧状態によって生み出されたものと考えるのは妥当であろう。

共同遊びの成立に作用したもうひとつの要因は、母親の意識の変化に起因する本児への関わり方の変化である。これまで母親はNがダイナミックな運動遊びを中心とする遊びで本児との関係改善を遂げている旨の話を聞かされても「私は得意じゃないんです」と否定的な感想を述べていた。しかし、この時期になると母親は積極的に運動遊びに関わるようになった。たとえば、本児が三輪車に乗りながら、別な三輪車を指差し母親も乗るように誘うと、これまで一度も乗ったことがなかった母親が三輪車に乗り、本児の後ろについて遊びはじめた。あるいはまた、トランポリンで本児と一緒に遊んだことがなかった母親がトランポリンに挑戦しようとして「お母さんのれるかなあ」「壊れないかなあ」というと、本児がすかさず「Nさんのれる、Nさんのれる」（「Nはトランポリンに乗れるから、お母さんも大丈夫だよ」の意）の言葉に母親は意を決してトランポリンに乗った。この時点から、母子の楽しいトランポリン遊びが成立するのである。こうしてNとの関係で行われていたダイナミックな運動遊びが母親との間でも実現するようになった。このような母子の遊びの変化には、本児の愛着行動によって触発された母親の意識変化が大きく作用していると考えられる。幼稚園での心理的抑圧経験とそれに起因すると思われる体調不良といった一種の危機的状況が本児をして心理的安全基地としての母親への接近行動

を起こさせ、それが母親における意識変化とそれに伴う関わりの変化をもたらしたと推察できよう。この時期における母子の共同遊びの成立には以上のような背景が考えられる。

＜事 例 2＞

本事例は両親の希望により親子３人の遊び場面によって開始された。全18回のセッションのうち、親子３人でのセッションが９回、母子が６回、父子が３回であった。本事例における対人関係の逆転現象は、親子場面の父親と母親の間で生起し、他者場面においては後述するように数回のセッションでのやりとりが見られただけで、基本的な関係の変化は認められなかった。そこで、以下では表５に基づきながら、本児と父母との関係の変容について主に記述する。

第１期：道具的対象としての父親への接近

初回のセッションで初めてプレイルームに入ると、戸惑っている父母とは対照的に本児はすぐに遊具棚に向かい、数種類の遊具に手を伸ばした後、モンテッソリ教具のペグさしを取り出し遊びはじめた。順番どおりペグをはめ終ると,次に型板はめに移るといったように、本児は形や大きさなどのマッチングを要する遊びに熱中した。この間、父親は本児に寄り添い、「ピンポーン」「ブー」などと声をかけていたが、母親は父子の位置からは少し離れたところから傍観的に眺めているだけであった。

父親は本児のひとり遊びが一段落するのを待って、本児を運動遊びに誘った。それらの運動遊びは、本児の身体を高く持ち上げる「高い高い遊び」、「くすぐり遊び」、そして「トランポリン遊び」などであった。本児は父親の行う運動遊びに興じて、笑顔やダイナミックな身体運動を表出した。当初は父親の側からの誘いかけに本児が応じるという形でのやり取りであったが、そのうち本児自ら父親の手をとりトランポリンに誘うことがたびたび出現するようになった。

神園 (2000) は自閉症児が他者とトランポリン遊びを経験することによって、両者の心理的関係が急速に接近することを指摘し、その要因として跳躍の同期性、身体動揺から生起する両者の身体接触、そして視覚的見えの共有と身体の姿勢の共有、などから醸成された一体感が大きく作用していると主張した。つまり、トランポリンを一緒に跳ぶことによって自閉症児と他者に一体感が醸成されることによって、身体動揺に伴う快の情動が両者に共有されるようになり、そのことが両者の心理的距離を接近させたのであろうというのである。本児の父親に対するトランポリン遊びの要求行動にも神園（2000）が指摘した背景を想定できるであろうか。結論から言えば、否定的である。それは以下に指摘するような理由による。本児から父親にトランポリン遊びを要求する頃になると、本児による父親の誘い方やトランポリン上での父子の跳躍姿勢（両者は同一方向を向き、父親が本児の肩をつかみ、身体を密着して跳ぶ）などが常に同一であり、父子のトランポリン遊びはパターン化の様相を深めてきた。それに伴って、本児はトランポリンの跳躍中に目を閉じることが多くなったり、壁の大鏡に映る自己の鏡像を凝視し自己の運動と鏡像の連動性に注意を向けるといった行動が顕著になってきた。これらの行動は本児の関心が身体の浮遊感や視覚的見えの変化など、いわゆる自己の内部感覚に閉じた刺激へ向かい、それらが快の情動をもたらしていることを物語っている。すなわち、本児は父親とトランポリンを跳んでいるにもかかわらず、本児の内的状態は一人遊びの時と同じような様相を呈していたと思われるのである。つまり、本児のトランポリン遊びにおける快の情動は父親と共有することで生じてきたものではなく、自己に閉じた、いわば自己受容的な快の情動であると考えられる。

トランポリン遊びは身体の浮遊感のような自己受容感覚や、跳躍に随伴する外界の見えの変化といった視覚的経験などの感覚と跳躍運動の協応を楽しむものである。一般に、自閉症児においては、自己受容感覚と運動の随伴性は固執行動を生起しやすい。それではなぜ、一人でトランポリンに乗らずに、父親を誘うのであろうか。それは、本児が一人ではトランポリンの快を享受できず、父親の助けを借りなければ達成できないからである。つまり、本児は父親を道具的に利用することで自己の要求を達成していると言えるのである。本児は道具的な反応を求めて父親に接近している可能

表５　事例２の対人関係

	父親への接近（第１回～第４回） （道具的対象としての父親）	母親への愛着（第５回～第15回） （安全基地としての母親）	母子交流遊び（第16回～第20回） （遊びの対象としての母親）
父親 ↑↓ 本児	身体接触を伴う運動遊び （トランポリン、くすぐり、「高い高い」） 父親のタイミングの良い関わり（表１） ⇩ 快刺激｛視覚的変化 身体動揺に伴う自己受容感覚｝ ⇩ 行為や身体運動の再現要求	父親の関わりに対する本児の応答 父親への接近行動 ｝減少 ⇩ 以前の本児の応答を期待した父親の強引な関わりの顕在化 ⇩ 父親への拒否反応・距離化 父親が近くにいても、わざわざ母親の所へ出向き要求する。 （道具的対象としての父親機能も消失） ⇩ 一人遊び	父親の関わりの変化 運動遊び ⇩ 本児の一人遊び（モノを対象）への追随 ↓ 父親への拒否反応の消失 （但し、父親へも接近行動なし） ⇩ やり取りは成立しない
母親 ↑↓ 本児	親の傍観者的関わり 本児への遊びを全面的に父親に依存 母親主導の指示的関わり 身体接触はなく、専ら本児が持っている玩具の色名や名称を尋ねる ⇩ 逃避行動 ⇩ 母子関係の一層の希薄化 （母親が接近すると離れる）	母親存在の安心感 不安な場面で母親の存在を確認する。 例：棚の上に登る時、途中で振り返り母親の存在を確認する。 不快な場面で母親に特定の行為の要求をする 例：父親の強引な関わりで不快になると、母親に自分の好きな歌を歌うように要求する。 母子のやり取りは成立せず 母親の本児に対する基本的態度に変化はなく、傍観者的であったり、時には指示的関わりに終始する。 ⇩ 母子が共同して遊ぶことはないが、本児の視野内に母親が存在すると安心する。	母親の態度の変化 筆者による指導的介入（父親を介して） 本児との距離の接近 タイミングの良い声かけ・応答 本児の興味・関心の尊重 ⇩ 指導内容が母親の態度として形成 ⇩ やり取りの成立 ⇩ 共同遊びの増加（表２）

他者	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
↑↓	○	○	○	△	○	×	×	×	×	×	×	△	×	×	△	△	○	△	○	○
本児	○：母子分離可能 △：一旦、室外に出て母親の元に行くが、再度部屋に戻る ×：母子分離不可				第５回：ヘビ遊び（びっくり箱） 第12回・第15回：ポンプの誘因											第16回・第18回：母親の姿の確認のみ				

琉球大学附属図書館

性が高いのである。その証拠に、自分ひとりで達成できる遊び、例えばペグさしや型はめなどに本児が興じている時に父親がその遊びに加わろうとすると、嫌がり父親の手を払いのけたり、父親の介入を避けて、当該の遊具を持ったまま父親から離れた位置で再び遊びはじめるのである。

こうした現象は、トランポリンに限らず、表面上は父親と快の情動を共有していると思われる他の運動あそびにおいても同様であった。例えば、三輪車に本児が乗ったまま、父親に三輪車ごと空中を移動させてもらう「ET 遊び」や「高い高い遊び」なども、父親と楽しさを共有した共同遊びを行っているわけではなく、常に父親を自己の要求を実現させるための道具として利用しているのであった。

この時期、本児は自己の要求を一人では実現できないときに父親に接近し、父親を道具として利用して要求の充足を行っていた。表面的には父親との共同遊びが成立しているように見える場面でも、実際は遊びの中心が本児の一人遊びで占められていたのである。

本児と父親とのダイナミックな関わりとは対照的に、母親は父子の関わりを傍観的に眺めているだけであった。父親が都合でセッションに参加できない時（第２回）でも、母親は第１回と同様に本児に積極的に関わることはなく、本児の一人遊びを眺めているのみであった。したがって、第１回のセッションで本児の遊びを全面的に父親に依存しているように見えたのは、実は母親自身が本児と上手く遊べないためであったことがわかった。ただ、ときどきではあるが、本児が父親との遊びに一段落して、ペグ差しや型はめなどの静的な遊びに興味を移して遊びはじめると母親も本児の側に座り込み関わりを持とうとする場面があった。そんな時でも母親は本児の気持ちを無視した強引な関わりをするのであった。たとえば、顔の形の型板はめの遊具に本児が挑戦している時に、母親は耳の部分の型板を取って、「これ何？」と尋ねる。本児はその型板を取り返そうとして手を伸ばすが、母親は渡そうとしない。本児が不快の奇声をあげるに至って母親はようやくその型板を返すことになるが、その際にも「これは耳でしょう。耳」と言いながら型板を本児に渡した。さらに、「お母さんの耳はどれ？」「お耳はいくつある？」など、次々と質問を浴びせるが、本児は全く関心を示さず、応答しなかった。こうした場面は本児と母親が関わる数少ない場面で常に認められた。本児が関心を持って遊びはじめた遊具を取り上げて、無理矢理に母親の意図する関わり（たとえば、モノの名称の質問、モノの機能に基づいた遊びなど）へと導く、いわゆる母親主導の関わりはこの時期の母親の特徴であった。遊び場面における母親のこうした特徴は、この時期に散見された靴を履いたり、口を拭いたりといった本児の生活動作に言及する際の厳しい口調や態度の特徴と符合した。つまり、母親は生活動作を躾る時と基本的に同じ態度で、遊び場面においても本児の意図を無視した指示的、教示的な関わりに終始していたのである。本児の意を解さない母親の関わりに対して、本児は拒否反応を示すだけでなく、たとえば母親が介入してくると本児はそれまで遊んでいた遊具をもって母親から離れ、場所を変えて遊びはじめるといったように母親から逃避するようになった。こうした本児の行動がさらに母親の本児への志向性を萎えさせる結果となり、母親の関わりは一層希薄になった。

この時期では、本児は父親に接近し、母親から逃避もしくは回避するというように父母に対して全く逆の関わりを示した。しかしながら、両親に対する本児の関わりの本質は基本的に違いはないと見てよいであろう。なぜならば、本児と父親の遊びは先にも指摘したように、三項的関係によって遊びが両者で共有されているわけではなく、本児が自分一人ではその遊びを実現できないために父親をいわば道具として利用しているに過ぎず、基本的には本児の一人遊びに他ならないからである。愛着に裏打ちされた共同遊びが成立しているように見えた本児と父親の関わりも実は父親を道具的に利用した一人遊びに他ならないとすれば、本児の父親と母親に対する関わりは基本的に違いはないと考えられるのである。

第２期：心理的安全基地としての母親への愛着

第５回になると本児はこれまでと違って父親の誘いかけに応答しなくなり、一人遊びが多くなった。その結果、父子の運動遊びを中心とするダイ

ナミックな関わりが次第に減少してきた。父親への接近行動が減少するにつれて、本児は母親を見る頻度が急激に増加した。セッション前の茶話会ではしきりに母親の腕を触ったり、母親の手で自分の口を拭いたりなど、以前は見られなかった母親への身体接触が増加してきた。父親の話によれば、以前は祖母の家に行くと祖母に接近することはあっても母親には殆ど関心を示さなかった本児が、最近は母親がそばにいないと常にその居場所を探すようになったとのことであった。母親の接し方が特にこの時期に変化した兆候は見当たらず、しかも両親の聞き取りからも本児の変化をもたらすような心当たりもないとのことから、この時期の本児の変容の背景を推測することは難しい。

セッションを重ねるにつれて、本児の母親への接近行動はますます頻度が増加し、本児が不快な状態になったときは必ず母親に接近したり、不安になると母親を探してその存在を確認するような行動が出現するようになった。例えば、父親に叱られると母親の側に走り寄り、自分の好きな歌の一節を口ずさんで母親にその歌を歌って欲しいと要求した。母親が一通り歌い終わると、本児は安心したように母親から離れて再び一人遊びに没入した。以前は要求が阻止され不快になると洗面所に行き、手に石鹸をつけて洗う手洗い行動が頻発していた。不快になると「手洗い」というこだわり行動に逃げ込むことで、不快を払拭していた本児が、この頃になると愛着対象である母親にある行為を要求することで不快を快に転換できるようなった。不快や不安に遭遇すると快を求めて愛着対象に接近し、自己に快をもたらす行為を要求するという本児の行動は、別府（1994）が指摘した自閉症児における愛着の発達の第３段階に位置づけられている。別府（1994）によれば、この時期は行動や場面の背景に他者の意図や感情が存在することを覚知できるようになるとされている。ところが、本児の行動はこの段階に止まらず、愛着の質的な発達変化の過程で最も高い水準に位置づけられている関係、すなわち、不安や不快な場面に立ち向かう際の心理的安全基地として母親をみなした上での関わりに変貌を遂げていた（別府、1994の第４段階）。例えば、本児はこの時期玩具棚の上がたいへん気に入っていた。玩具棚に上るとき本児は棚の２段目に足をかけると必ず後ろを振り返り、母親の存在を必ず確かめていた。振り返って母親が見当たらないと本児はすぐに棚を降りて母親を探しはじめた。本児のこの行動は次のように考えられる。すなわち、玩具棚は約２メートル近い高さがあり、しかも棚に足をかけて登るため身体が不安定になる。おそらく、本児は２段目に登ったところで高さに伴うある種の不安を感じたのであろう。そして、その不安を払拭し、２段目から上に登るためにの勇気を得るために、母親の存在が必要になったのではないだろうか。このように考えれば、本児は母親を心理的安全基地とみなして関わっていることになり、愛着の質的な発達変化の過程で最も高い水準に達していると想定される。

こうした、本児の母親に対する愛着水準の高さとは裏腹に、本児の遊びは依然として一人遊びから広がりがみられず、本児は母親の介入を決して許容しなかった。そして、本児の一人遊びに母親が関わろうとすると、当該の遊び道具をもって母親から逃避するのであった。したがって、この時期においては、母子間に共同遊びは全く成立していなかった。本児にとって快適な状態は、母親による一人遊びへの介入がなく、自分の意のままに行動でき、しかも心理的安全基地としての母親が見える範囲にいることなのである。なぜ、こうした矛盾したような現象が起きるのであろうか。ひとつの解釈は、次のようなことである。すなわち、本児には母親への接近要求さらには共同遊びの要求は存在するものの、これまでの母親の不適切な対応によって形成された回避動因が同時に存在するため、一種の葛藤状態にあり、その表現形が前述した状態、すなわち母親の見える範囲での一人遊びになったと考えることである。先にも指摘したように母親は本児に対して常に指示的に関わり母親主導の遊びを押し付けるような関わりをしていたことから推すと、この解釈の妥当性を主張できる。小林（1999）も自閉症児の母子間に同様な状態が存在することを指摘し、この葛藤状態を動物行動学における接近・回避動因的葛藤（approach-avoidance motivational conflict）という言葉を用いて説明している。

一般に、自閉症児は一人遊びへの他者の関与を

極端に嫌う傾向がある。中田（1984）が指摘した「自我の自由度の侵害」に対する極端な抵抗がそれである。本児例においても基底にはこうした抵抗感が存在している可能性は否定できないが、高い水準の愛着行動との並存を考慮したとき、上述のようにその起源を母子の関係性に求めることは充分に妥当性を持つと思われる。

母親は本児の一人遊びに介入するたびに本児の拒否に合うので、次第に本児への働きかけ自体が減少してくる。その結果、本児は一人遊びに終始し、それを母親は少し離れた位置から見守るという状態が益々顕著になってきた。

第３期：遊びの対象としての母親

前述したように、第２期になって本児は母親を心理的安全基地とした行動を示すようになったが、遊びの形態はいっこうに変化が見られず、相変わらず一人遊びに終始していた。本児の興味、関心から発した一人遊びであっても、それらはすぐにパターン化してしまうために、本児の遊びは展開が見られず広がりを欠いていた。したがって、本児は既に獲得されているパターン化した遊びを次から次へと渡り歩き、落ち着いて遊び込むことなかった。しかも、母親は本児のこの状態を改善しようと試みることもなく、ただ漫然と本児の一人遊びを傍観している状態であったため、本児と母親の関わりはほとんど見られなくなっていた。

そこで、第15回セッションにおいて、この状態を改善するために筆者は母親に対して以下の二つのアドバイスを行った。母親は本児の一人遊びを離れた場所から見ていることが多く、本児との間に距離があった。そこで、まず第一に、母親には常に本児の側にいることを心がけるようにとのアドバイスを行った。第二に、母親は本児の興味や関心とは無縁な母親主導の関わりに終始していたため、本児の視線が他方に向いているときに声かけしたり、本児の意向を無視して一方的に関わることがあった。そこで、母親に対して本児の興味や関心を尊重して、なおかつタイミングよく関わるように勧めた。

アドバイスの効果はすぐに次のセッション（第16回）で認められた。母親はこれまでと違って常に本児の側に寄り添って、本児の遊びの流れに沿った関わりができるようになった。本児の目を見ながら声かけをする場面や、本児が発する不明瞭な言葉を何とか理解しようと努めている場面など、これまでの母親とはまるで別人のような母親の変貌ぶりであった。結果として、本児の遊びそのものには本質的な変化はみられなかったものの、母親の適切で自然な関わりのため、母子の関係性に変化が見られるようになってきた。まず、第一に本児は母親が接近しても嫌がらなくなり、逃避傾向は完全に消失した。したがって、遊び場面で母子が一緒に居ることが多くなった。そして、本児の視線が母親に向かう頻度が高まり、母親への関心が高くなっていることが伺われた。たとえば、母親がフープを使って縄跳びのような跳躍をしている様子を見て、本児もフープを持って母親と同じような行為をしてみるといったように、母親の行為の模倣がたびたび出現するようになった。この背景には、母親の楽しそうな快の情動を感じ取り,その上で自分もその情動を共有したいという本児の動機を想定することができる。こうした母子の関係を基礎として共同遊びが出現しはじめた。表６はシャボン玉遊びの場面で、本児が自分の吹き棒を母親に渡し、母親をシャボン玉遊びに誘っている場面である。自分の吹き棒を譲ってでも母親と楽しい遊びを共有したいとの本児の想いがよく表れている。

母子関係における本児の遊びは、第１期における父子関係における本児の遊びと本質的に異なることは明らかである。すなわち、第１期においては本児は遊び場面における自己の要求を実現するために、いわば道具として父親を利用していたのに対して、第３期では母親の内的な情動や感情を感知し、それらを共有することに遊びの新たな喜びを見出しているのである。

この頃になると、本児は父親の呼びかけにほとんど反応せず、父親が近づくと逃げるようなった。何とか関わろうとする父親の働きかけが前面に出ると、その働きかけは指示的、教示的になってしまい、結果的に父親の主導性がますます本児の拒否反応を強めることになった。こうしたことを繰り返すたびに、次第に父親の本児への働きかけは減少し、母親が都合で休んだ第18回セッションでは父親は本児の一人遊びを傍観的に眺めるだけに

なっていた。ここにきて父子関係と母子関係は全く逆転し、この時期の父子関係は第１期の母子関係そのものであった。

表６　事例２の母子の共同遊び

本　児（C）	母　親
シャボン玉の吹き棒に液をつけて鏡を見ながらゆっくり吹く	
	「おう、うまい」と褒める
再び、吹き棒に液をつけ鏡を見ながら吹く	
	「おう、大きい」、「バシッ」と言いながら、本児が吹いたシャボン玉を壊す
吹き棒に液をつけ吹く	
母親に自分が持っていた吹き棒を渡す	
	「ん？これお母さんに」と言いながら受け取り、「Ｃの分は」と問う
別の吹き棒を持ってきて、母親に見せる	
	シャボン玉を吹いて「わあ、きれい」「見て、見てＣ」「きれいね」とシャボン玉を指さしながら言う
母親と同じシャボン玉を見ながら「きれいね」と言う。	
吹き棒に液をつけ吹く	

他者関係の変遷

特定の他者Uとの関係は、唯一第５回の「へび遊び」（びっくり箱からへびが飛び出す玩具を用いた遊び）において情動のやりとりが見られたことを除けば、全体を通してほとんど形成されなかった。このことは、これまで述べてきたように親子関係においてさえもまだ確かな愛着関係を築けていないという事実を考慮すれば、当然の結果なのかもしれない。本児は他者関係を構築するための基盤がまだ形成されていなかったとみるべきであろう。したがって、他者遊び場面は専ら本児の一人遊びに終始した。

Uとの遊び場面において、本児が遊戯室から出て、親の待つ部屋に向かったセッション、すなわち母子分離ができなかったセッションを表５に×印で示した。本児は父親へ接近行動を示し、母親に愛着行動を示さない時期（第１期）には他者場面において遊戯室から外に出ることはなかった。しかしながら、母親への愛着行動が出現しはじめた第６回頃から、他者遊び場面になると遊戯室から出て、母親が待つ部屋に行き他者遊び場面が成立しなくなった。この傾向は約４ヶ月間も続いた。しかし、母子の情動交流が成立し、共同遊びが成立するようになると他者遊び場面において母子分離が可能となった。

このような他者場面における母子分離の変遷は極めて象徴的な意味を暗示しているように思われる。つまり、母親を愛着対象として見なした関わりができない段階においては、当然のことながら母親からの分離不安は生じない。ところが、母親に対する愛着が形成されるにつれて、それと拮抗するように分離に対する不安が生じてくる。しかしながら、母親との間に充実したやり取りの関係が切り結べるようになると、母親の表象（内的作業モデル）を心理的安全基地とすることで分離不安に立ち向かえるようになる。こうした一連の母子の関係性の変化が母子分離の可否の背景に存在していたことが推測される。

＜事 例 ３＞

親子遊び場面と他者遊び場面における本児と母親および特定の他者との関係を、「関係性の逆転」という観点で分析したところ、表7に示した５つの時期に区分できた。それぞれの時期について、その特徴を記述した。

第１期：対人接触への拒否

この時期、本児は手振りや首振りなどの常同行動を頻発させていた。また、遊戯室に入ると部屋の壁に手を振れるとすぐに反対側の壁に向かって走り、壁に触れると再び反対側へ走るといった、「壁タッチ行動」とでも言える行動を繰り返した。時には走りながら、手や首を振る常同行動を随伴することもあった。行動は落ち着かず、いわゆる多動が前景に出ていた。唯一、動きが止まったの

は、こだわりの対象である新聞の折り込みチラシを見つけたときであった。本児はそのチラシを折って、掌に納めることができる大きさに折り曲げた。この間は動きが止まっているが、一旦チラシを小さく折ってしまうと今度はそれを持って常同行動や壁タッチ行動に耽るといったことが始まるのであった。したがって、母親や他者との遊びは全く成立しなかった。遊びが成立しないだけでなく、他者は勿論のこと母親が接近しただけでも本児は逃げてしまうのでほとんど関係を持てなかった。さらに注目すべきことは、母子遊び場面と他者遊び場面の間に本質的な違いが認められなかったこ

表7　事例3の対人関係

	母　親 ⇄ 本　児	他　者 ⇄ 本　児
第1回－第9回	常同行動が頻発（手振り、首振り） 多動傾向 こだわり行動（チラシ） } 他者（母親を含む）が接近すると逃げるため関わりを持てない ⇩ 遊び場面における母親と他者に違いは認められない	
第10回－第19回	本児の発達水準とかけ離れた関わり モノを仲立ちとする関わり （本児はモノの機能性は理解できない） ⇩ 無関心・関わりなし	本児のこだわりに同調する（チラシを選ぶ） ⇩ 快の情動共有を図る事態を設定 ⇩ 身体接触を拒否しなくなる ⇩ くすぐり　　運動遊び（トランポリン）
第20回－第23回	母親への接近行動 母親に追随 母親の音声模倣（車の擬音） 母親の関わりが特に変化した事実はないにも関わらず、本児の接近行動が出現 （他者関係の投影）	他者の過度な関わり （他者の存在を認識させようとして） チラシを隠す 要求をすぐには聞き入れない 過度なくすぐり こだわりの対象を排除 } 常同行動の多発 ⇩ 無関心（関わりなし）
第24回－第28回	母親への反応が希薄化 モノ（黄色いクレーン者、ブルドーザー）のこだわり ⇩ 母親が接近すると離れる（初期の関係へ回帰）	他者の交代 他者が男性Yから女性Tに交代 だっこの試みが成功 ⇨ だっこ要求 ⇩ 身体接触を伴う運動遊び
第29回－第35回	母親へのだっこ要求 他者との間でだけ成立していた「だっこ」が母親を相手に出現 ⇩ 母親の関わり方の変化 本児の発達状態に応じた関わりが出現 （乳児をあやすような声かけ） 情動を基盤とする本来の母子関係の芽生え	「だっこ」要求が消失 ⇩ 関わりの消失

とである。

第２期：他者Ｙへの接近

この時期になって母子遊び場面と他者遊び場面との間に違いが現れてきた。他者Ｙは本児との関係を構築するために、本児のこだわり行動に同調することによって快の情動共有を図る事態を設定した。Ｙは遊戯室に数十枚の新聞の折り込みチラシを持ち込んだ。Ｙが１枚のチラシを本児に渡すと、本児はそれを受け取り丹念に眺め回した上で、脇に置いた。すぐにＹが次のチラシを渡すと同じように眺めるといった繰り返しの末に、本児は気に入った１枚のチラシを見つけ、それを何度か折り曲げて掌の大きさにしたものを握って走りはじめた。この本児の一連の行為をＹがそっくりそのまま模倣すると、本児は時々Ｙに視線を向けて不思議そうに眺めた。このチラシを使った遊びを何度か経験すると、本児はＹが接近しても逃げなくなっただけでなく、身体接触すらも拒否しなくなった。Ｙが本児の身体をくすぐると、本児は大きな笑い声をあげたり、そのうちくすぐられることを期待しているかのような姿勢でＹのくすぐりを待ち構えるようになった。このような身体接触の延長上でトランポリン遊びが実現した。以前はトランポリンに恐怖感を抱いていた本児が、Ｙの誘いかけで容易にトランポリン遊びが実現した。本児は楽しそうな表情を浮かべ、時には大きな笑い声をあげながらＹと一緒にトランポリンを跳んだ。こうして本児はＹとのダイナミックな身体運動遊びを通して、快の情動を経験することができるようになった。

他方、本児と母親との関係はいっこうに変化がみられなかった。母親の本児への関わりは専らモノを仲立ちとした働きかけであった。たとえば、ミニカーやショベルカーあるいは縫いぐるみなどの玩具を使った機能遊び、さらには積み木を家に、そしてチラシを洋服に見立てた象徴遊びまでも出現していた。本児はモノの機能や社会的意味についての理解は全く形成されておらず、まだ感覚運動的な認識水準にあるため、当然のことながら母親が提供するあそびは本児にとって遊びにはならなかった。本児は母親が提供するあそびから快の情動を経験することができないだけでなく、自己の興味や関心とは異なる遊びを母親主導のもとに提示されるために不快感だけが蓄積することになった。結果として、母親に対する本児の拒否反応が以前にも増して顕著になった。

第３期：他者Ｙの過度な関わりによる母親への接近

第２期において本児のこだわりに同調することで可能となったダイナミックな運動遊びも、Ｙのわずかな対応の拙さによって急速に減退した。Ｙは自己の積極的な関わりが本児のダイナミックな活動を生み出したことに触発されて、自己の存在を本児に認識させようとして、これまでとは違った過度な関わりをするようになった。たとえば、本児のこだわりの対象であるチラシを本児が手放した隙に取りあげて本児の反応を確かめたり、本児の要求をすぐには聞き入れなかったり、あるいはまた明らかに不快な表情をして逃げようとしている本児を無理に引き止めて過度なくすぐりをしたりなど、本児にとって不快の情動を引き起こすような関わりが多くなった。その結果、Ｙがトランポリンに誘っても全く応じようとはせず、ダイナミックな身体活動がほとんど消失した。かわって、首振りや手ふりなどの常同行動が以前にも増して頻度が増加した。したがって、Ｙと本児の関わりは完全になくなってしまった。

他方、母親との関係は逆に以前と比べて改善した。本児は母親の接近を嫌がらなくなっただけではなく、むしろ母親の後をついてまわるようになった。さらに、母親がミニカーを動かしながら「ブーブー」と擬音語を発すると、その音声を真似るといった音声模倣が出現した。こうした本児の変化については母親側の対応にその原因を見出し難い。なぜならば、母親の本児に対する態度や関わり方は基本的に以前と何ら変化が見られないからである。考えられることは、本児の変化にはＹとの関係の悪化が影響しているということである。すなわち、Ｙの関わりがもたらす不快の情動に比べて、母親との関わりが相対的にポジテイブな意味あいを帯びてきたために、母親の側への接近行動が生じたというものである。このことは一つの解釈としてあり得るが、今後、事例を重ねることによって詳細に見極める必要があろう。

第４期：他者Ｔへの接近

第24回のセッションにおいて、Ｙが卒業を迎えたため特定の他者をＴに交代した。一般に、子どもは遊びの相手が見知らぬ他者に代わるとその他者に警戒したり、人見知りするのが常であり、多くの自閉症児も同様な反応を示す。しかしながら、本児はむしろ交代したＴに初回のセッションから接近行動を示した。このためＴは接近してきた本児を何気なく抱き上げ、抱っこした。実は本児はこれまで抱っこに極端な拒否反応を示しており、Ｙは勿論のこと母親に対してまでも抱っこを拒否していたのであった。Ｔはそのことを全く知らぬ間にごく自然に本児を抱っこした。そして、本児は嫌がることなく、抱っこされたのであった。筆者はもとより、この事実を知った母親も驚くばかりであった。なぜ、こうしたことが起きたのであろうか。母親によれば、本児は大人の男性に恐怖を示し、近寄らないそうである。父親も例外でなく、父親が近づくと本児は逃げるとのことであった。Ｙは男性であったことを考慮すれば、本児がＹに抱っこされなかったのは当然のことと言えるかもしれない。しかし、母親にも抱っこされなかった本児が、いとも簡単にＴに抱っこされた理由は定かではない。別府 (1994) によれば、快－不快の情動と行動や場面の随伴性が極端に変動するのは、行動や場面の背景に存在する他者との関連で随伴性を理解できないためであると述べている。行動や場面の背景に他者の意図や感情が存在していることを理解できない段階においては、快－不快と場面や行動の随伴性は固定していないために、突然に変動することがあるというのである。本児の場合もこれまで不快であった抱っこが突然、快をもたらす行動に変貌したのは、抱っこする人の感情や意図を介在させないままに行為としての抱っこと快の情動との随伴性を獲得していたためなのであろう。

Ｔは本児を抱っこして振り回したり、抱っこしたままトランポリンで跳ねたりといった運動遊びを積極的に試みた。本児はこれらの遊びが気に入ったらしく、時折大きな笑い声をあげて喜んだ。それ以来、本児はＴに対してたびたび抱っこを要求するようになった。

結果的に、本児とＴは抱っこを介して身体運動を伴うダイナミックな関わりが可能となった。本児は抱っこを通して快の情動を幾度となく経験するにつれて、Ｔに対する興味や関心が次第に大きくなると、今度は逆に母親への関心が急速に希薄化し、以前に見られた母親への追随行動も消失してしまった。そして、結局以前のように母親が接近すると逃避行動が現れ、モノへのこだわりが前景に出て、母子関係は第２期における関係に回帰してしまった。

第５期：母親への接近

第29回のセッションにおいてＴとの間だけで成立していた抱っこを、本児は母親に対しても要求するようになった。母親は初め戸惑ったような態度を見せたが、本児の要求に応えて、抱っこが成立した。そのときの印象を母親は「Ｍはまだ抱っこが必要なんですね。とうの昔にその時期は過ぎているのだと思ってました」と語っている。この母親の気づきは実際に本児との関わり方に投影するようになった。最初はぎこちない抱き方で、声かけも少なく、しかもその言葉は年齢相当の子どもに話しかけるような慣用語であったが、抱っこの回数が増すにつれて、抱き方も自然になり、声かけもまるで赤ちゃんに話しかけるような幼児語や擬音語が多くなった。このときの感想を母親は「子どもは身体を寄せてきてくれて、無理に抱っこしているような感じはしなかった。本当にＭ（本児）に話しかけているような気持ちだった」と述べている。ここにきて母親は本児の本当の姿を認識したようであった。その後の母親の関わりは以前とは大きく異なり身体接触を伴う運動遊びが中心となった。こうした母親の関わりに呼応するように、第４期における本児の母親に対する拒否反応は完全に払拭され、逆に母親への接近行動が顕著になった。本児は常に母親の側を離れず、時には母親の膝の上に寝転がったりなど、いわゆる愛着行動が目立つようになった。この頃になると本児は以前にこだわりを示したモノへの関心が消失してしまった。たとえば、時たま母親が遊びの目先を変えるために本児が以前に興味を示していたモノ（鈴、ブルドーザーなど）を遊具棚から取り出し本児の前に置くと、本児はそのモノを棚に返しに行き、母親にまとわりつくのであった。

この時点における本児はモノよりも母親に密着していることが楽しいと感じているようであった。こうして母子の関係は抱っこの成立を契機として急速に好転し、良好な関係が構築されてきた。

ところが、この経過とは裏腹に本児とＴの関係は急速に冷え込んでしまった。第29回のセッションで本児が母親に抱っこを要求し、それが叶えられると他者遊び場面ではＴに対してはうってかわったように抱っこの要求が完全に消失してしまった。本児とＴの身体接触はとれなくなり、ひいては両者の関わりの中心をなしていた運動遊びが成立しなくなった。さらに、本児はＴが接近すると逃げるようになり、結局のところ両者の関係は完全に消失して第１期の状態に回帰してしまった。本児とＴとの関係で出現した抱っこが、母子関係の中で実現するようになった途端に、両者の関係性までも見事なまでに逆転してしまった。

全体考察

自閉症児の遊び場面において、特定の人との間に接近行動が生じ、関係が良好になると、それまで関係を保持してきたそれ以外の他者との関係が逆に悪化するという現象が臨床場面においてたびたび観察された。そこで、本研究では親子遊び場面と他者あそび場面における対象児の行動観察を通して、親もしくは特定の他者との関係性に注目して分析をおこなった。その結果、本研究で対象とした３事例のすべてにおいて、上述した関係性の逆転現象が確認され、筆者の臨床的印象が裏付けられた。

関係性の逆転現象は基本的には親もしくは特定の他者との関係で得られる快の情動の体験を契機として生起した。すなわち、親を含む他者の行動と自閉症児の快の情動が随伴することによって、子どもと親もしくは特定の他者との関係性が一義的に決定された。しかも、一旦形成された関係性は排他的な特性を帯び、それまでに保持されてきた親もしくは特定の他者との関係は逆に減退もしくは解消した。

以上の特徴は３事例に共通して認められたが、事例間で異なる特徴もまた見出された。発語が存在する事例１と事例２は無発語の事例３に比べて大きく異なる特徴を有していた。

事例１は言語による簡単なやり取りが可能であった。したがって、特定の他者への警戒心が解け、心理的に安定して行動できるようになると、遊びにおける快の情動体験の量が関係を一義的に支配するようになった。本児は言語によるやり取りができるため、それだけ特定の他者と共有できる経験を広げることができた。そのうえ、特定の他者が提供する遊びは母親のそれに比べると本児にとって格段に豊富な快の情動体験が得られるため、本児と特定の他者との関係は急速に接近した。しかし一旦、ストレスによる精神的な不安定状態や体調不良に陥ると、本児は母親への接近行動を強め、結果的に親子遊び場面における関係性が好転した。このように、事例１では言語の存在と心理的安全基地としての母親の存在が母親および特定の他者との関係性の変動を規定していると言える。

事例２は事例１に比べれば言語能力は劣り、一語発話の水準に留まっていた。したがって、モノの名称や限られた指示語などは出現していたが、やり取りといえる程の言語的なコミュニケーションは成立していなかった。こうした言語能力上の問題を抱えた本児が、大きく変化したのは、母親への愛着行動を契機としていた。母親への愛着行動が出現する以前の他者関係は快の情動体験を提供してくれる他者としての父親との関係が唯一であった。それゆえ、母親と特定の他者（快の情動を提供するが、父親を越える水準には及ばない）に対しては関係は成立していなかった。ところが、本児が母親への愛着行動を示しはじめ、その後母親を心理的安全基地と見なした行動が出現するようになって母子愛着の基盤が形成されると、母子の共同遊びが成立するようになった。この変化とは逆に、単なる快の情動を提供するだけの父親との関係は消失してしまった。このことは、モノや行為によってもたらされる快の情動体験よりも愛着対象としての母親の存在の方が本児との関係の形成にとって重要であるということを物語っている。

事例２は言葉によるやり取りに問題があるとはいえ、事例１と事例２の両事例ともに発語が存在した。しかも、事例１では既に母親を心理的安全基地として愛着の基盤を形成できており、事例２

においても観察の途中から同様な基盤が形成された。事例１と事例２における対人関係の逆転現象には対象との快の情動体験に加えて、言語の存在および基盤となる愛着関係の水準の高さという２つの要因が大きく作用しているようである。

ところが、事例３においては母親と特定の他者に対する関係性の変動は母親と特定の他者が提供する場面や行動と快－不快の情動の随伴性によって一義的に決定されていた。それゆえ、わずかな状況変化によって随伴関係が変化すると容易に本児と母親および特定の他者との関係性は変動した。ある人との新たな快の情動体験によって、既に形成されていたはずの別の人との関係性が、いわばワープロの「上書き」のように簡単にかき消されてしまうのである。なぜ、こうした現象が生じるのであろうか。この現象は本児が他者との関係を通して行動や場面の持つ意味を獲得できないことによって生起していると考えられる。本児は他の２事例に比べて知的障害の程度が重いだけでなく、自閉症の程度も重篤であった。それゆえ、本児は他者の存在を表象レベルで保持できないだけでなく、他者の情動や意図を覚知し、共感を通して行動や場面の意味を理解するという、いわゆる間主観的な理解も成立しなかった。そうすると、本児は感覚運動水準においても他者と共有できる意味を獲得できないことなる。そうした事態では、本児の対人関係は行動や場面と快－不快の情動の随伴性によってしか形成されないことになるであろう。このような人を介在させない随伴性は、脆弱で偶然の僅かな状況変化によって突然に変動する可能性が高くなる。本児の対人関係が容易に変動する背景として以上のようなことが想定される。

最後に指摘しておかなければならないことは、対人関係の変動の結果、それまで良好に推移してきた関係がそのまま保持されず、希薄化したり、あるいは元の関係に戻ったりする現象についてである。

事例３では上述したように母親もしくは他者の行動やそれが行使された場面と快－不快の情動体験の随伴性が対人関係を規定しているので、随伴性が消失すれば関係性が元に戻ることは容易に理解できる。ところが、事例１や事例２では他者の情動や意図といった内的状態を基盤として関係が構築されており、しかも表象水準で他者の存在を把握している可能性がある。だとすれば、心理的軋轢などで安全基地としての愛着の基盤に立ち戻るのは自然であるとしても、それまでの特定の他者との関係が希薄化したり、元に戻ることの意味は理解し難い。このことはまさに自閉症児の対人関係の特異性を象徴している。

一般に、自閉症児における社会性の問題は、養育者との間で形成された二者関係が他者一般に対して波及していかないところにあるといわれている（山上、1999）。養育者との閉じた関係の中では実に表現的な振る舞いを見せる自閉症児が、保育所場面で保母を相手にすると、そうした振る舞いが背景に退いてしまうといったことは日常的によく観察されることである。こうした現象は知的に高い能力を持つ高機能自閉症児やアスペルガー症候群においても同様に指摘されており、このことはまた社会性障害を自閉症の一次障害と見なす根拠にもなっている。このように、養育者をはじめとする特定の相手との関係が他者一般に波及しないという自閉症児に特有な社会性障害の本態を明らかにする上で、本研究が指摘した対人関係の逆転現象は一つの糸口になるのではないかと考えている。

謝　辞

本研究の実施にあたり、ご協力いただきました３名の対象児の皆さんとその保護者の方々に厚く御礼を申し上げます。子どもさん達の健やかなご成長を祈りつつ、ここに記して感謝の意を表します。

参考文献

Ainsworth, M. D. S., Blehar, M. D., Water, E., & Wall, S. (1978). Patterns of attachment, Hillsdale, N. J. :Erlbaum.

Baron-Cohen S. , Leslie A.M., & Frith U. (1985). Does the autistic child have a “theoryof mind”? Cognition, 21, 37-46.

別府 哲 (1994). 話し言葉をもたない自閉性障害幼児における特定の相手の形成、教育心理学研究、42, 156-166.

Capps, L., Sigman, M., & Mundy, P. (1994).

Attachment security in children with autism. Development and psychopathology, 6, 249-261.

神園幸郎 (2000). 自閉症児における愛着の形成過程 － 母親以外の特定の他者との関係において －. 琉球大学教育学部障害児教育実践センター紀要、第２号、1-16.

Kanner, L. (1943). Autistic Disturbances of affective contact. Nervous Child, 2, 217-250.

小林隆児 (1996). 自閉症児の情動的コミュニケーションに対する治療的介入 －関係性の障害の視点から－. 児童青年精神医学とその近接領域、37(4); 319-330.

小林隆児 (1999). 自閉症の発達精神病理と治療. 岩崎学術出版社、160-161.

中田基昭 (1984). 重症心身障害児の教育方法 －現象学に基づく経験構造の解明－. 東京大学出版会、335-338.

Rogers, S., Ozonoff, S., & Maslin-Cole, C. (1991). A comparative study of attachment behavior in young children with autism or other psychiatric disorders. Journal of Child and Adolescent Psychiatry, 3, 1274-1282.

Rogers, S., Ozonoff, S., & Maslin-Cole, C. (1993). Developmental aspects of attachment behavior in young children with pervasive developmental disorders. Journal of the American Academy of Child and Adolescent Psychiatry, 30, 483-488.

Rutter, M. (1978). Language disorder and infantile autism. In M. Rutter & E. Schopler (Eds.), Autism; A reappraisal of concepts and treatment (pp.85-104). New York: Plenum Press.

Rutter, M. & Bartak, L. (1969). Causes of infantile autism: Some consideration from recent research. Journal of Autism and Childfood Schizophrenia, 1;20.

Shapiro, T., Sherman, M., Calamari, G., & Koch, D. (1987). Attachment in autism and other developmental disorders. Journal of Child and Adolescent Psychiatry, 226, 485-590.

Sigman, M., & Ungerer, J. (1984). Attachment behavior in autistic children. Journal of Autism and Developmental Disorders, 14, 231-244.

杉山登志郎 (1990). 自閉症 －最近の研究の進歩－. 精神科治療学、５、1505-1515.

杉山登志郎 (1995). 自閉症児への精神療法的接近. 精神療法、21、325-332.

Volkmar, F. R., Cohen, D. J., & Paul, R. (1986). An evaluation of DSM-Ⅲ criteria for infantile autism. Journal of the American Academy of Child Psychiatry, 25, 190-197.

山上雅子 (1999). 自閉症児の初期発達 －発達臨床的理解と援助－. ミネルヴァ書房、129-157.